

Graded Direct Method Association of Japan
News Bulletin

No. 30 英語教授法通信 1978年5月20日

発行：GDM 英語教授法研究会事務局 〒154 東京都世田谷区豪徳寺 2-27-19
吉沢 美穂方 TEL (03) 429-5929

編集：足立正治、原田弘、片桐ユズル、大西 信子

何度くりかえしても新しい授業

吉 沢 美 穂

上級セミナーやクラスでやった授業を、「あれはとてもよかった。もう一度見せてください」と言われ、公開講演会などでくりかえしたことが何回かある。最初の時は自分でも「今日の授業はよかった」という満足感があるのに、2回目はいつも「こんなはずではなかった」と不満が残る。これは、その時に新しく考えた授業でないと、いのちが失われるということの例である。

GDMのセミナーをはじめてから25年、実際に生徒をGDMで教えるのは、それから数年前になるので、ETPを何回教えたかは数えきれない。はじめのうちは、授業が終ると、planとその反省をノートに書いていたが、近年は授業の記録を残していない。前回に同じところを教えた記録は、役に立たないし、それにとらわれると、新しいplanを考える時に、妨げになるからである。

GDMをはじめてやる人たちには、1回、2回と教えたを工夫して、3回目にはうまく教えられると指導しているが、それは3回目以後は同じことをくりかえして、うまく教えられるということではない。

ETPのほとんどのページの絵や文は、本を見なくても目に浮んでくるようになった現在、私はこうして授業の準備をする。まずETPをはじめて読むような新しい気持ちで、その日教えるページを注意して読む。そしてそのクラスでは何がその日の目標であるかを、新しく書く。次

にその項目や単語を教えるのに、どんな situation がよいのか、実物は何を使うか、絵はどんな絵がよいかを、生徒の顔を頭に浮かべながら新しく考える。次にそれらのものをどの順に使うかの計画をたて、必要な物品を用意し、絵も新しい気持ちで選んだり、新しくかく。こうして出来あがった lesson plan は、結果的には、前に同じページを教えた時に使った実物と同じものを使い、同じような順で教えることが多くなるのは当然であるが、新しく考えること、生徒の反応によって plan にこだわらず授業を進めることが、活きた授業のいのちである。「今日はこのページか」と、前のノートを見て物品を揃え、前に使った絵を持って、安易な気持ちでクラスに行くようでは、活きた授業はできないし、あとに、さわやかな満足感に残らない。

新しい気持ちで教えることで、今でも新しいことを発見し、なぜ今まで気が付かなかったのかと恥ずかしくなることがある。この間 relative what をやった時、生徒が That is what you got it. と言った。シマッタ！ which の目的格はまだあとだった。ここでは what は be 動詞か、せいぜい have くらいにしておくべきだった。ETP をよく見てごらん。そうなっているではないか。これは最近直面した例である。「今までそれに気がつかなかったの？」と言われそうだから、これで終りにする。

Graded Direct Method Summer Seminarのお知らせ

と き：1978年8月18日(金)～22日(火)
と ころ：日本YMCA同盟「東山荘」 TEL (0550) 3-1133
申し込み先：大阪YMCA英語学校「GDMセミナー係」 TEL (06) 441-0892
一般クラスの他に Advanced class もつくる予定にしています。
詳細は会報をごらん下さい。

根古谷先生のクラスと GDMの魅力

天 野 隆 司

根古谷さんの授業を見て、いつも不思議に思うのは、
どういふしだい、生徒があんなに活発に、言いたいほ
うだいの発言をするようになるのか、ということだ。習っ
た単語の数は100もあるまい。動詞といえば、takeとput
とbe動詞だけである。それなのに、教室に根古谷さんが
顔を出すと、とたんに子供たちは、機関銃の一斉射撃よ
ろしく、ドンドンパチパチ英語を連発させるのだ。まる
で雪合戦かパチンコでギャングごっこをやっているみた
いに、自由に、屈託なく、彼らは英語を話している。根
古谷さんがちょっと動作をしたり、黒板の絵でもかえよ
うものなら、たちまち教室には英語のドンパチがまき起
こる。いったいどういふしだい、あんなふうになるん
だろう。

そしてかならず事件が起こる。ぼくが見たときは動物
の足だった。黒板にはられた絵を見ながら、子供たちは
既習の英語を使って、言えるかぎりのことを言っている。
と突然動物たちの足がポロリととれた。室中の人間は、
生徒も見学中の先生たちも、ふいの出来事に呆気にとら
れ、静まりかえった。そしてこのオドロキとともに、こ
の日はじめて習うofが生徒の頭のなかに焼きつけられる。
するともう嬉しくってたまらないといった調子で、この

新式連発銃を使って、子どもたちはたちまちドンドンパ
チパチはじめるのである。

根古谷さんのクラスはほんとうに楽しい。彼がGDMの
名手であることは疑いないし、そこにいろいろな創意と
工夫がこめられていることもわかる。しかし、それ以上
になにかが、彼の授業をこれほど屈託ない楽しいものに
しているのだ、と思う。

GDMの先生たちは気の毒である。日本語で説明してし
まえば簡単にすむものを、それをしないで、一つの語、
一つの文をなんとか子供たちに伝えようとする。上手は
上手なりに、下手は下手なりに、涙ぐましい努力を重ね
るのだ。しかし考えてみれば、言語活動というものは本
来そういうものではあるまいか。流暢にペラペラやるの
は軽薄である。本当にいいこと、本当に伝えたいこ
とは簡単にペラペラやれるものではない。無器用でもい
い、自分の頭で考えて、体をつかって、目をつかって、
手と足をつかって、そしてこれに言葉を加えて、ぼくた
ちは相手に思いのたけを、その一部をなんとか伝えるこ
とができるのである。そしてこれが本来言語活動という
ものの姿であろう。GDMのクラスでたぶん子供たちは
教師のこの涙ぐましい努力に感動しつつ、言語活動の本
来性を体験するのではあるまいか。そして教師と生徒の
間に、この伝達しようとする意思が成り立つところに、
根古谷先生のクラスに見られるような爆発的な言語活動
の渦がまき起こるのではあるまいか。

GDMの魅力は詰まる所教師と生徒の間にそのような
本来の言語活動が成立することにあるのだと思う。そし
てそれはたんに導入の技術の巧拙に尽きることではある
まい。それは英語の世界をこえて、もっと広い世界、人
間と人間の関係にかかわることがらであると思う。

筆 者

吉沢美穂さん —— セミナーの上級クラスでは、みん
なから恐がられているのですが、ほんとうはやさし
い人で、家庭にあっては、ご主人思いの、有能なお
くさんなのです。お忘れなく。

天野隆司さん —— 話をしているだけで、こちらまで
やる気が出てくるようなactiveな人です。千葉方面
で頑張っています。

麻田暁枝さん —— 茨木市の人で、もと大阪YMCAで
おしえていました。育児から開放されたら、またGDM
でおしえたいとのこと。

片桐ユズルさん —— 京都精華短期大学で英語をおし
えておられる教授です。しかし、大胆な決断力と、
繊細な洞察力をかねそなえた彼を知っている人には、
やはり詩人片桐ユズルでしょう。

小林信久さん —— 埼玉県岩槻市で英語塾を経営され

紹 介

ている人です。塾経営とGDMの両立に日夜奮闘中。

升川潔さん —— ICUで助教授をされています。先日、
ICUの中で、ある先生が、「升川潔助教授」をまちが
えて、「マスカワキヨスケ教授」と云ったそうです。
それ以来ICUでは、「キヨスケ教授」で通っています。
これからは、「キヨスケさん」と呼びましょう。

斉藤直美さん —— 山田和歌子さんと2人で、名古屋
YMCAにGDMを定着させるために尽力された人で
す。りっぱな体力(?)もてつだって、文字通り、今
では名古屋YMCAの牽引力になっています。

山田和歌子さん —— 名古屋YMCAで、最初にGDM
でおしえられた人です。主婦業とGDMとを両立さ
れています。また、非常に明快、軽快なはなしをさ
れる人です。

(原田記)

編 集

今号の編集は関西支部の番です。これをきっかけに
人海作戦的に会員相互のコミュニケーションのネット
ワークを再編できるかもしれないという期待をもった
が、それほどの大仕事にならずに、編集はさっと終っ
てしまいました。(Yuzuru)

後 記

GDMの問題点をさぐるために名古屋、千葉、埼玉、
広島と歩いて、欠乏していたエネルギーの充填ができ
たのもうしばらくはGDMをつづけられそうです。
このBulletinがみなさんのエネルギーの補給に役立
てばいいのですが。(足立)

G D M とわたし

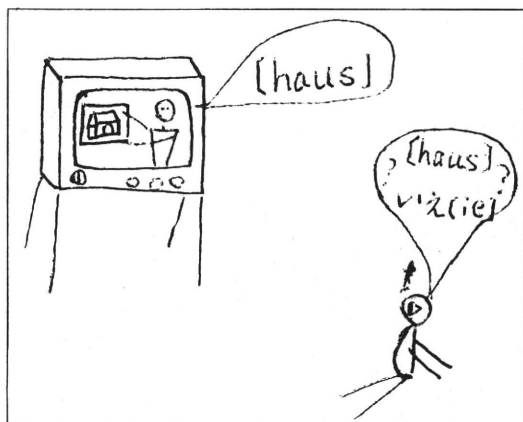
麻 田 暁 枝

私がGDMに出会ったきっかけは？ 初めに英語を知った時のことから思い出してみた。

小学校6年生の夏休みだった。見たい番組が終ってもまだ消さずに、何となく見ていたテレビで、中学一年生向けの英語番組をやっていた。の絵を見せ〔haus〕、今までは/いえ/〔ie〕だと思っていたものが〔haus〕と言われ、驚いた。

中学校へ行ったら「英語」という新しい科目を習うんだという事は知っていた。が、実際目の前で/いえ/〔ie〕という既知のことば(語)に対して〔haus〕ということばが示された時、驚いた。また新しい事を知った喜びで一杯だった。それでは、今まで使っていたいろんなことばは英語でどう言うのか？ 私は中学入学までの半年間も待てず、近くの英語塾へ習いに行った。

こうして英語というものに興味を持ち、学生時代は好きな学科だった。学校を卒業してからも、YMCAで英会話を習ったり、いろんな英会話のグループに顔を出したりしていた。



そんなある日、小学生に英語を教えるはくれないかと頼まれた。そりゃ英語は好きだけど、人に教えるとなると問題は別だ。`教える、`という事に関して何の知識もないし、もちろん自信もないし…。そんな時に受けたのがGDMの講習会だった。片桐ユズルさんによるEP P. 1～P. 30あたりのデモンストレーションだった。私が今まで受けた英語の授業の方法とは全然違うものだった。先生は2語か3語言うだけで、後はニコニコと生徒の顔を見ながら言わせていく。日本語なんて考える余地をなく、英語だけで意味が視覚的に整理されていった。先生がそんなにししゃばらず、知識を教え込もうとせずについて、生徒に多く発言させられるのは愉快だ。私も何とかやってみようと思った。

初めてのクラスで見様見まねでやってみた。初めは緊張していた表情の子供の顔にパッと嬉しそうな様子が現われてくる。きっと私が初めてテレビで〔haus〕ということばを知った喜びと同じだろう。

こうしてGDMに出会ってもう7年程になる。(この3は育児のため遠ざかっているが。) GDMに出会い、いろんな知識を得た。と同時に多くの良い友達を得た。GDMの人々の活躍は私に良い刺激となり、また頑張ろうという気を起こさせてくれる。

小 林 信 久

なんだジーディーエムって？ 一昨年の春、朝日カルチャーセンターの案内を見て思いました。その頃私は自分の塾の小中学生に、できる限りdirectに教えたいと思っていました。まァ何か参考になるだろうくらいの気持ちで生徒の一員になったのが吉沢先生と弘田さんのクラスでした。オッカナイことになっている吉沢先生は、そこではまったくそのようなことはなく、張りのある歯切れの良い声で生徒たちをぐいぐい引き込んでいきました。思いもかけない新鮮な表現ができるのに驚き、自分と英語の間のヴェールが少しずつはがされていくようでした。教え方を考える余裕もなく、気がつく生徒としての自分にはまり込んでいました。

こいつは良さそうだ、と感じはじめたのと御殿場のサマーセミナーへの誘いを受けたのは同じ頃だったでしょうか。そこでは、わかっていたはずのカンタンな語の root senseの深さ、それに対する自らの認識のなさ、加えて自分の英語力の貧弱さを痛感。“オレには英語を「教える」なんてできるのか”という新たな疑問と不安。(それは再び昨半夏のセミナーを経験した今でも消えていません。)

カルチャーセンターではEP. IIを終え、升川先生のPeople in Livingstonに入りましたが、最も忙しい時期にぶつかり思うように出席できず失礼してしまったのが今でも心残りです。

翌年4月から、まったく初めての生徒にI、Youから教え始めました。しかし、いったい生徒は「英語」を学びとってくれているだろうか？ 誤って覚えてはいまいか？ 学校と塾で異なるmethodに接している中学生にはどのような影響があるだろうか？……。

約1年過ぎました。中学1年生の反応を大ざっぱにまとめると、まずdirectである点を生徒はほとんど歓迎してくれています。「動作や実物で説明するのでわかり易い」という者が多いし、新出語なども「自分の頭でイミを判断する態度ができるようになった」者も居る。「人前で発表するのがこわくなくなった」し、ますます「外人と話したい」という気持ちが強まっている者も2～3名居る。

(4ページ下へ)

名古屋 YMC A 訪問記と GDM 教材整理学

3月10日金曜日に名古屋 YMC A の小学生英語科の授業を見た。加藤須磨子さんと上野治子さんが1年目の生徒に questions をおしえ、内木るみ子さんが3年目の生徒に “keep” のあたりをやっていた。特別なことは別になかったが、ふつうだと questions はなかなか生徒から言ってくれないものだが、名古屋の生徒たちはよくいつていたので、ふだんの授業のつきかさねが いい のだな、とおもった。

授業中不意におとずれる、またとないチャンスを何回かのがしているのがみられたが、臨機応変の処置がとれないのは、語学力のせいだろう。にもかかわらず、生徒がのびのびと、かなり良いことを自発的にいつてるのは、ルールがとてもうまく敷かれてあつて、その上につて安全運転がおこなわれているのは主任の斉藤直美さんの努力が大きいようだ。

特色のひとつは新人は初年度は class observation をかならずしなくてはならないことが制度化されている。

これは新人が先輩のおしえかたを見るだけでなく、生徒の心理にも立ち入つて、まちがいの論理とか、エンジンのかかりかた、しらけかたなど、見てほしいものである。

結婚その他家庭の事情などによる講師の異動がはげしいことが悩みのたねと聞いたが、古い人が、いつも、新しいひとに教えなくてはならないために、かえつてコミュニケーションが活発になつて、古いひとと自分の穴に とじこもつてはいられないから、幸か不幸かわからない。

毎夕、クラスがおわつたあとでも、すぐ帰つてしまうのではなくて、かならずかんたんな meeting で意見の交換がおこなわれるのも、良い習慣だ。

それからもうひとつは教材が完備し整理が行きとどいていて、これも斉藤さんが大阪中央 Y での長年の経験を生かしたものだろう。よそでも参考になるとおもうので、何枚かの写真とともに紹介します。

片桐 ユズル

またある子は「塾でははっきりわかつた気がしなくても学校でやるとき抵抗なく理解できる。きっと頭の中のどこかに残っているのだろう」と言っている。とにかく生徒たちは「表現したい」気持を強く持っている。「覚えねばならない」学校英語には生徒は苦痛を感じているようだ。

彼らは一応、私に合格点をつけてくれたようだが、私はまだ GDM にコーフンしている。だから客観的に見ることができない。ユズルさんの言うように、GDM で happy にやっている人には外の世界は見えにくいのだ。今後どのように GDM を私の中に位置づけるかが問題だ。ただハッキリしているのは私がこれでメシを食っていることだ。初めて英語とぶつかつて格闘している生徒と同じく、私も GDM と格闘をつづけねばならない。

Class observation の記録や、teaching plan を入れるための袋が見える。Teaching plan は主任の check を うけてから、実行にうつされる。

Flash cards が ABC 順にコーラの箱にはいつている。スピードからいえば、flash cards は、さがすより、書く方が早い。そのときはカードとマジックが at hand にあるべきこと。

EP のページ順に、stick figure がいつている。EP の絵をこのようにばらばらにかいておくと、紙芝居式につかえて便利。

「小英科教材用」という箱にはおもちゃ類やガラクタ、“whats” などがいっぱいいつているが、他人から見たら、ゴミ箱としかおもえないだろう。

下の斉藤さんが開けているこのひきだしは、各講師個人用の pictures を入れる。Pictures のなかには、それをつくったひとでないと、どのようにかつたらよいのか、まったくわからないものも多いから。

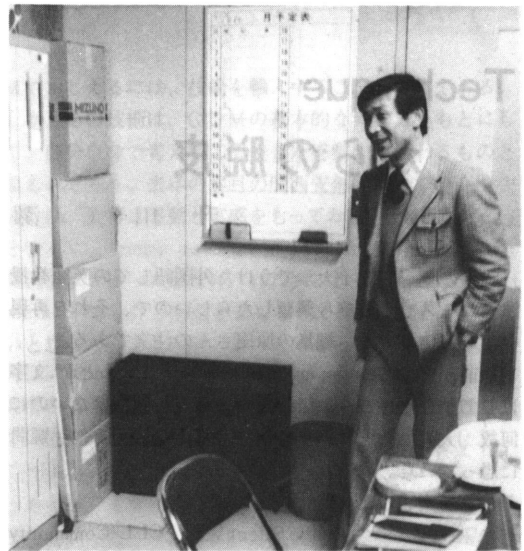




右の加藤直子さんがあけているひきだしには、persons, things, animals などに分類されて、だれでも共通に使える写真がはいっている。
異った大きさの写真でも、すべて同じサイズの台紙にはることと、裏面はつかわないで片面だけにはることが、整理のこつ。



上はある日の講師会。左より斉藤直美、加藤直子、加藤 須磨子、鈴木敦子各講師と、長谷川和宏主事。



上の長谷川主事は、捨てたはずのガラクタが、また部屋にもどっているのにおどろいている。斉藤「この部屋のもはやたらにすてないでください。教材なんだから。それは“shelf”をおしえるのにいるんです」

長谷川「事務の研修会で、捨てることをおそわってきたんですがねえ」

捨てられてこまるものには、GDM教材であることを示す、ちいさなラベルでもはったらいかがでしょう。

⇒



GDM. Basic English 関係の図書を多数取揃えております。

S B S (株) スクールブックサービス

〒160 東京都新宿区高田馬場1-26-5 F 1ビル 4階 電話 (03) 200-4531

Technique

からの脱皮

升 川 潔

昨年の夏 ハワイ大学でうけた外国語としての英語教授法のコースで 何やら興奮したらしいので、それを再現せよ というのが、編集の原田さんの注文である。

以前から、This is my penとかI am here とか、文字にして読むだけなら、こんなつまらない英語はないのに何故 大人でもそれをGDMでやると面白がるのか疑問に思っていた。

その答を実感したように思った。

ハワイでは、主として the Silent WayとCLL(Community Language Learning) という“教授法”を体験したが、全体からみて共にある共通点が見られる。

“Whole-person approach” 従来のコトバ中心の訓練(例えばpattern practice)と全く異なり、人間同志の心理的敏感さを大切に。いかに相手を理解するように努めるかという「学習態度」ないしは「人間に接する姿勢」を学ぶようにしむけられる。我々がコミュニケーションをする時には、言葉だけが伝わるのではなく、その人全体から表情とか憎しみとか喜びとか感情もその他もろもろも一緒になって相手に伝わる。今まで言葉だけの練習をしていたから英語教育は失敗したのだ。その点GDMは whole-person approachをしていたのだと思った。

“Learner-oriented” 生徒をいかにdefensiveにさせないかが教育には必要だろう。あれも憶えろ、これも憶えろ テスト、テストで 先生がいつも評価者だと生徒は防御的にならざるを得ない。これらの方法では先生は従の位置にあって、生徒が自分で独立して学ぶようになるまでの手助けをするという位置に徐々に後退して行く。Silent Wayでは先生が極度にしゃべらない(50分の授業で5秒位の発言) ことによって生徒がルールを自分で見つけ、自分で文を作ってみるのを助ける。先生はYesの表情をしたり、首をかしげてみせる。生徒は自分で出口をみつけようとする。CLLではそれを生徒間の心が通いあうcommunityという形でgroup dynamicsを作れるように、先生が下から方向づけを少しづつしてやる。要は生徒がどう感じ、どう発見し、独立して学ぶようになるかを、生徒の答や顔や行動から見ぬくという作業を先生というcounselorがする。

要するに、言葉の授業が言葉だけにやらないで、whole person approachなのである。GDMでも「言葉をとなえなくて語りなさい」といわれるのは、言葉によってその他の要素が伝わるからだ。飛行機をmakeさせたり、箱の中に物を入れてwhat?をするのもよいが、それは表

面的な技術であって、「しかじかの物を使って……を導入する」のではなくて我々自身が生徒と本当にcommunicationをしたがっている姿が自然に出て行かなければ、GDMも小手先の技術だけに終わってしまうだろう。(参考: スチューデントタイムズ9月9日、10月7日(77年)に紹介記事がある)

Of G. D. M. and Me

— 幹を太らせたもの —

Naomi Saito, Nagoya

何故手でささせることを強調したり、生徒の目をじっと見つめ、あんなにも努力して身ぶり手ぶりで示すことがGDMの授業では大切な意味を持つのか。大阪中央YMCAで片桐ユズルさんが小学生に教えているのを見て初めて頭の中でボンヤリしていたものがはっきりと見え、からだの中に入ってきたように感じた。GDMとのほんとうの出会いと言える。この時、これがGDMという実感と共にshockもあった。私にとってshockだったのは、GDMのlive situationがただ日本語を使わず、状況を設定し、SEN-SITで教えるだけのことでなく、自分自身のからだを使うことだった。教師と生徒との生身の人間としてのぶつかりあいなのだ。

Body Languageの中に、人間は誰でも無意識の内に自分に必要なspaceやterritoryを持っていて、それがpersonalityとも関連すると書いてある。class observationをしたことで私は、私の中にあるterritoryや、抑圧のあるところや、からだの固さや抵抗に気づくことになった。GDMでwritingの時しか机は使わないようにすると、私にとっても、生徒にとっても机という身を隠す場所はない。Territoryからお互いに一歩を踏み出すことからGDMの授業は始まる。それだから第一時間目“I, You”の導入はsensationalだ。そしてユズルさんの『英語まちがいのすすめ』(季節社)に書いてあるように、英語を教えることは、文法事項を教えることではなくて、“take”なら“take”ということばを教えることなんだ。

生徒に実感、発見の喜びがなければ自発的発言を期待できないし、私自身が実感を持っていないことばを教えても生徒にsense of achievementを与えることはできないから、ことばに意識的になることにも目を向けることになった。

Basic English そのものを教えるのが目的ではないけれども、室さんの“Basic English as a Sorting Machine”を読んだり、勉強会でBasic Englishのoperationsとdirectionsのroot senseと、それがETPの中でどのようにexpandして使われるか調べたことが、ことばの道具としての働きを知り、使うおもしろさを発見する喜

びとなり、ことばの実感を持つ大きな手がかりになった。“keep”の意味をgetした時、outという状態をkeepする意味で“keep out”が立入禁止になるとか、keep in touch with meが私の中で生きたことばとして使えるようになった。“make”の導入の時には、実際に教室へポットやスプーン、カップ、紅茶など持って行って何をするのかと思わせて、“I will make tea”と言って作って見せて、それから生徒に紙を渡して飛行機を作らせたらmakeの意味がはっきりとわかった顔をしていた。

ことばを教えるには、相手に声がとどくからだとの関係があるのを竹内敏晴さんの『ことばが劈かれるとき』(思想の科学社)を読んで実感した。生徒であった時の私が頭でわかっても体得していなかったように、私自身がこころとからだをひらいて生徒と向い合わなければ、生徒と英語を通して触れ合うことはできないだろう。またほんとうに触れ合うことなしには、ことばを伝えることはできないだろう。

いい GDM の授業をしたいと思った。自己を解決したいと思った。“Dibs In Search of Self”は、play therapyを通しての自己開発の記録だが、私にとってはGDMが他の扉をあけるきっかけになった。けれども昔はもっとGDMで感激した。なのに今はそれ程感激しなくなった。受動的立場でGDMを見つめるだけでなく、能動的立場でGDMを実践しつづけることは、GDMが「自主独立的勉強法」であるが故に、幹を太らせるにはblockingが多いことも確かだ。それでも私は“keep in touch with GDM”を選ぶ。

GDMでおしえて一年

原 田 弘

去年の春、はじめてGDMセミナーに参加して、そのあとすぐに小学校6年生の子供たちに、GDMをつかっておしえはじめました。とにかく英語がすきで、経済学部卒業して、英語専攻の大学院に入った私にとって、GDMで小学生におしえることは、そんなにむづかしくないように思えた。Teacher's Handbookを見れば、itemごとにteaching suggestionは出ているから、EPをつかって、その順序どおりに、毎時間限られた語いでしゃべればよい、と安易な考えを持っていた。要するに、生徒と英語をつかってcommunicateすればいいのだと思っていた。おまけに、work sheetも既製品があって、すべてルールが敷かれている感じがした。しかしそのルールの上をはしっているうちに、いつも他人から授業のすすめ方、teaching pointをおしえてもらっている自分に気づいた。ルールは自分で敷くべきだ。もちろんGDM

Mでおしえるには、技術を輸入することも必要である。しかしその技術は、GDMの基本的な考え方をもとにして、自分自身で考えてこそ生きた感動がつたわるものとなるのだろう。去年の6月の関西支部研究会で小高一夫さんは、「教師は感動と実感をもっておしえる必要がある。」といて、“times as ~ as ~”のdemoを行った。(cf・関西支部ニュース8月号, 1977) これを見たとき、direct method でないと実感をともなうて教えることができないと思った。また同年、夏のセミナーで升川さんは、「教育は“whole-person-to-whole-person”だ。だから、教室の中で、生徒は先生の声だけを聞いているのではなくて、先生のからだ全体から出されている情報を感じとっている。」といった。

ある時、東京の箕田さんに、「GDMには演技力も必要だ」ということを聞いた。これは、自分自身をcontrolできるということかなと思った。授業をやっているときは、その授業全体を外からながめている自分がいつもいて、授業のながれをcheckしている。一方では、その場でsituationにあった発言をして、生徒とcommunicateしている自分がいる。

ついこのあいだは、京都で、片桐ユズルさんがセミナーをしているのを見学した。その日は、セミナーの2日目だった。いきなり、「エッリー」、「エッラ」ときた。気がついたら、自分自身がセミナー参加者と一緒になって、「イオ ソノ クウイ」、「エッラ エラ」、「エッリー エラ」と言っていた。

「はいこれで、イタリア語はおわります。」という片桐さんのことばを聞いて、はじめて、「あ、イタリア語をしていたのか」と気がついた。なぜこんなにすうっと、自分自身がはいっていくことができたのか不思議だった。そのあと本番の英語のtrainingを見ていて、ひとつ発見した。それは、I, youを導入するとすぐに、youを使って生徒に呼びかけていた。そして、なによりも、片桐さんは本当に生徒とcommunicateしていたということだ。

以上、この一年をふりかえって見て、私にとっては、激動の、そして収獲の多い一年だった。

G D M —異質との出会い—

山 田 和歌子

昨秋の名古屋のセミナーで片桐よう子さんが1時間目のI, Youをされた。導入がすんで少ししたら、よう子さんは生徒の1人である私の後にまわって、もう1人の生徒の前に私を立たせ、2人が向き合うようにされた。生徒同志でもI, Youが言えるようにという意図であったと思う。だが私はどうしても目の前の相手をYouと言えなかった。その状況で私にとってのYouは後に隠れている



よう子さんであったのだ。こういう事は実際のクラスでもあった様な気がするが、今度は生徒の立場でYouとよびかけたのでとても心に残った。Youという言葉は不思議な力を持っているのではないだろうか。一度向き合って目を見つめ相手をYouと呼びかけ、声が確かにとどいた事がわかると、そのYouは心の中にずーっと入ってきてしまい現実に向き合っていないでもYouになってしまう。いったん心の中に入ったYouは、逆に今度はIを認識する手がかりとなって、Iとは全く異質な存在として、向き合い、とりくむべき相手となる時もある。この経験をするとIとYouはとても日本語には置き換えられなくなってしまう。もともと異質の文化というものは手持ちの言葉で置き換え、勝手に自分流に解釈できるものではない。それどころかもっと恐ろしい力を持ち、それまでの安定していた立場を根底から揺り動かす程の激しいショックを与えるものだと思う。GDMで教えていて今まで何故自分の認識を改めなければならなかったのだろうか。GDMに出会って初めて、言語の異質性、文化の異質性に触れたような気がする。始めから英語は日本語には置き換えられない。又置き換えるのが難しいという認識で教わっていたら、中学生達は“Aren't you-?”という否定疑問の答えのYes, Noにあんなにとまどわないですんだろし、I hit water. とかMy father is easy. とは書かないと思う。

ところがGDMでは第1回目から、安心な日本語は全く聞こえてこないし、真正面から見つめられ、いきなりYouと呼びかけられるのだから大いに心を揺さぶられることだろう。しかしこの時こそ両者にとって大切な瞬間なのだと思う。言葉では表現できないかもしれないが、子供達は異質なものにガツンとぶつかるだろうしstrangeな気持ちになるだろう。こちらでも出会いなのだから相手に声を届かせたくて真剣である。この様な言葉にならない緊張と興奮は一生の間でもそんなにあるとは思われない。異質なものにぶつかった時に、人間はともて興奮し、不思議な謎を解きたいという気になる。その居心地の悪さと取り組んでいる内に、今まで知らなかった自分とも出会うので、もっと知りたいという学ぶ姿勢が出てくると思う。日本語にはなくて、難しいと思われる部分を後まわしにする変な親切さよりも、あのI, Youの強烈な異質性の方が人間を育てていくのではないだろうか。

生態学的モデル としてのGDM

片 桐 ユズル

人間をばらばらにしようとする力がつよくはたらく今

の世の中で、そうでない方向でがんばるための方法がいくつかあるが、ぼくにとってはGDMもそのひとつになり得るようにおもえた。しかし外国語というものはなんといっても、まだるっこしいものだ。しかし英文科に投資してしまったもので、英語をおしえるほかに能がないから、しかたがない。

GDMの特色のひとつは、それがもどづいている Basic English がたんなる単語表ではなく、有機的に関連しあった小宇宙をつくっていることだ。コンラート・ローレンツは『ソロモンの指環』で、近くの川や池からすくってきた水や動植物を水槽にいれて、ちいさな生態系を自分の部屋の中につくることをすすめているが、GDMはことばでそういうことをやったようなところがある。言語材料の要素が最少限にしぼってあることは、ちょうど科学の実験をするときには、よけいな要素ができるだけ入らないようにしてあるのと同じような結果がある。

ことばのはたらきについての洞察ばかりでなく、ややこしい教材に気をとられなくてもいいから、先生と生徒のやりとりの機微もよく見えてくる。それから flash cards を書いたり、stick figure で紙芝居をつくったり、クラスに見せる写真をえらんだりという視聴覚教材を手づくりすることから、デールの三角錐ばかりでなくコジブスキーの一般意味論の《抽象のレベル》ということも実感をもってわかってくるようになった。

GDMでおそわる生徒は、ひじょうに整理されコントロールされた場の中においてであるが、field work の言語学者が未知の言語を手さぐりするのに近い経験をするだろう。また、こういったモデルの体験は、ほかのことを自分で勉強しようというときに、勉強のしかた、方法論として、役にたつかもしれない。

言語材料の grading がきちんと整理されていることから、具体的な協同作業が可能である、という、文科系の守備範囲ではめずらしいことがおこる。それでGDMでおしえているひとどうしの人間関係はわりとらくにつくれるような感じがある。

つまり Basic English をつくった C. K. Ogden や English Through Pictures をつくった I. A. Richards はいつも平和とか民主主義のことをかかえていた。知識・情報がだれかに独占されるのではなく、努力さえすれば、だれでも手に入れることができる、open なものであるべきこと。そのための手段としての英語。したがって、そのための英語には文法とか慣用による卑怯な落とし穴のないべきこと。

GDM class という laboratory をとおすと、いろいろなことがよく見えてしまう。いくつかの例をあげたが、さいきん困ったことには、世の中の荒廃、ひとのこのころの墮落があまりにもよく見えるので、自分の目をうたがいたくなることだ。